

頸部クモ膜嚢胞に嚢造袋術を実施した犬の1例

板本和仁[†] 谷 健二 田浦保穂

山口大学農学部 (〒753-8515 山口市吉田1677-1)

(2009年11月12日受付・2010年1月26日受理)

要 約

10カ月齢の未去勢雄のフラットコーテッドレトリバーが、歩行時のふらつきを主訴に来院した。神経学的検査で、固有位置感覚および踏み直り反応が両後肢で消失しており、測定過大が認められた。MRI検査では第1頸椎 (C1)―第3頸椎 (C3) の脊髓背側で、T2強調画像で高信号、T1強調画像で低信号の領域が認められ、C3に脊髓空洞症が認められた。脊髓造影検査ではC3頭側での脳脊髄液の涙滴状の貯留が描出されたことから、本症例を頸部クモ膜嚢胞と診断し、嚢造袋術を実施した。術後のMRI検査ではC2h3に認められた嚢胞と思われる構造物が消失し、脊髓内にT2強調画像で高信号の領域は残存するものの、脊髓の圧迫は著しく改善していた。術後36カ月経過するが症状の再発は認められず経過は良好である。——キーワード：頸部クモ膜嚢胞，犬，嚢造袋術。

----- 日獣会誌 63, 375～378 (2010)

[†] 連絡責任者：板本和仁 (山口大学農学部獣医学科獣医外科学研究室)

〒753-8515 山口市吉田1677-1 ☎083-933-5929 FAX 083-933-5930 E-mail : kaz2356@yamaguchi-u.ac.jp